

SPARC T3-4 サーバー

ご使用にあたって



Part No.: 821-3140-11,
2010 年 12 月、Revision A

Copyright © 2010, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. Government Rights. Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション (人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む) への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD, Opteron, AMD ロゴ, AMD Opteron ロゴは, Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel, Intel Xeon は, Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し, SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



リサイクル
してください



Adobe PostScript

SPARC T3-4 サーバーご使用にあたって

このドキュメントには、Oracle の SPARC T3-4 サーバーに関する次の情報および最新ニュースが含まれています。

- 1 ページの「標準構成でプリインストールされているソフトウェア」
- 2 ページの「Oracle Solaris OS のサポート」
- 3 ページの「パッチ情報」
- 3 ページの「サポート外の単一プロセッサモジュール構成」
- 4 ページの「ALOM CMT 互換性シェルのサポート停止」
- 4 ページの「製品の既知の問題」

標準構成でプリインストールされているソフトウェア

次の表に、サーバにプリインストールされているソフトウェアを示します。サーバの出荷準備時点が必要と判断されたパッチは、出荷前にインストール済みです。

プリインストールされているソフトウェアのパッチも含めて、すべてのパッチの最新情報については、My Oracle Support の Web サイトを参照してください。

<https://support.oracle.com/>

注 – プリインストールされている Oracle Solaris OS は、ZFS ファイルシステムにインストールされています。

ソフトウェア	地域	機能
Oracle Solaris 10 9/10 OS	ルートディスクのスライス 0 (および ABE のスライス 3)	オペレーティングシステム
Oracle VM Server for SPARC 2.0	/opt/SUNWldm	論理ドメインの管理
Electronic Prognostics 1.1	/opt/ep	特定の FRU 障害の可能性について早期の警告を提供します。

Oracle Solaris OS のサポート

サーバーの第 1 ドライブには Oracle Solaris 10 9/10 OS がプリインストールされています。OS は、サーバーに初めて電源を投入した後、適切な時点で設定することができます。

サーバーは次の Oracle Solaris OS リリースをサポートします。

- Oracle Solaris 10 9/10 パッチバンドル、または今後の互換性のあるパッチバンドルを適用した Oracle Solaris 10 10/09 OS
- Oracle Solaris 10 9/10 OS (サーバーにプリインストール済み)

サーバー、オプションのコンポーネント、およびソフトウェアのパッチに関する最新情報については、My Oracle Support の Web サイトを参照してください。

<https://support.oracle.com/>

注 – Oracle VM Server ソフトウェアを使用している場合、コントロールドメインとゲストドメインの両方が前述の Oracle Solaris OS 最小リリースをサポートします。

Oracle Solaris OS のインストールおよび設定の手順については Oracle Solaris のドキュメントを参照してください。

パッチ情報

必要なパッチはすべて出荷前にインストール済みです。サーバーに Oracle Solaris OS を再インストールする場合、OS、サーバー、およびオプションでインストールしたハードウェアまたはソフトウェアに必要なパッチをインストールする必要があります。

このドキュメントの発行時点でサーバーに必要なパッチは、次の Oracle Solaris 10 9/10 OS パッチでした。Oracle Solaris 10 9/10 OS を再インストールする場合は、これらのパッチの最新の互換バージョンをインストールする必要があります。

- 143647-08
- 144567-01
- 145098-02
- 145868-01
- 144486-04
- 144488-04
- 145786-02
- 145961-01

これらのパッチの最新バージョンをダウンロードする場合、また必要なパッチの最新リストを確認する場合は、My Oracle Support の Web サイトを参照してください。

<https://support.oracle.com/>

注 – オプションのハードウェアおよびソフトウェアに必要なパッチおよび更新に関する最新情報については、各製品のドキュメントを参照してください。

サポート外の単一プロセッサモジュール構成

『SPARC T3-4 サーバースerviceマニュアル』には、単一プロセッサモジュール構成に関する情報が掲載されていますが、現時点ではサポートされていません。単一プロセッサモジュール構成に関するマニュアル上の情報は無視してください。

QSFP ポートの背面 I/O モジュールの構成がサポートされない

背面 I/O モジュールには、次の 2 つの構成があります。

- QSFP ポートのある背面 I/O モジュール
- QSFP ポートのない背面 I/O モジュール

QSFP ポートの背面 I/O モジュールの構成は現在サポートされていません。QSFP ポートの背面 I/O モジュールの構成について記載されている、SPARC T3-4 サーバーのドキュメント内の情報は無視してください。

ALOM CMT 互換性シェルのサポート停止

SPARC T3-4 サーバーでは、以前のプラットフォームで利用可能だった Advanced Lights Out Manager (ALOM) CMT コマンド行互換性シェル (`cli_mode=alom`) はサポートされません。サポートされる Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 機能の詳細については、『SPARC T3 シリーズサーバー管理マニュアル』を参照してください。

製品の既知の問題

この節では、Oracle の SPARC T3-4 サーバーに影響することが判明している問題について説明します。問題の説明は次のように構成されています。

- [4 ページの「ハードウェアの問題」](#)
- [12 ページの「Oracle Solaris OS に関する問題」](#)
- [27 ページの「ファームウェアに関する問題」](#)

ハードウェアの問題

この節では、ハードウェア関連の既知の問題について説明します。

4 ポートの Sun Dual 10 GbE SFP+ PCIe TCP RX のパフォーマンスが低下する (CR 6943558)

複数の Sun Dual 10GbE SFP+ PCIe カードで 3 つ以上のポートを使用すると過度のパケットロスが発生します。その結果、送信および受信のパフォーマンスが著しく低下します。ポートが 2 つのみ使用されている場合は、パケットロスが最小限になり、転送/受信パフォーマンスは予想通りになります。

回避方法:

次のいずれかの手順を実行して、インタフェースのフロー制御を有効にします。フロー制御を有効にすることによって、パケットロスが大幅に低減し、パフォーマンスが改善されます。

▼ フロー制御を有効にする (システムの再起動を伴う)

1. 次のファイルに以下の行を追加します: `/kernel/drv/ixgbe.conf`.

```
fm_capable = 0;  
flow_control = 3;  
tx_queue_number = 2;  
rx_queue_number = 6;  
intr_throttling = 1000;
```

2. システムを再起動して、ドライバへの変更を有効にします。

▼ フロー制御を有効にする (システムの再起動を伴わない)

1. 次のファイルに以下の行を追加します: `/kernel/drv/ixgbe.conf`

```
fm_capable = 0;  
flow_control = 3;  
tx_queue_number = 2;  
rx_queue_number = 6;  
intr_throttling = 1000;
```

2. すべての ixgbe インタフェースを `unplumb` します。
3. `update_drv ixgbe` コマンドを入力します。

```
# update_drv ixgbe
```

4. すべての ixgbe インタフェースを `plumb` します。

PARALLEL_BOOT/HOST_LAST_POWER_STATE=enabled のエラー。AC 電源の再投入後の予期しない電源状態 (OFF) (CR 6994047)

HOST_LAST_POWER_STATE が enabled に設定されている場合に、AC 電源の再投入が行われると、電源投入操作の完了時にホストが OFF として示される場合があります。この状態情報は正しくない可能性があります。

回復:

システムの電源を再投入し、正しくない状態情報を消去します。

フロント USB ポートに取り付けられた USB サムドライブからのブート時にサーバーでパニックが発生する (CR 6983185)

前面の USB ポート (USB2 または USB3) の 1 つに挿入された USB サムドライブ (ポータブル USB フラッシュドライブ) を起動しようとする、サーバーにパニックが発生して起動に失敗します。

回避方法:

外部の USB サムドライブからブートオフする場合は、常にサーバー背面の USB ポート (USB0 または USB1) を使用します。

銅製の QSFP ケーブルはサポートされない (CR 6941888)

SPARC T3-4 サーバー 10 Gb ネットワークモジュールは銅製の QSFP ケーブルをサポートしていません。ネットワークモジュールは光の QSFP トランシーバモジュールおよびケーブルのみをサポートします。

回避方法:

サポート対象システムオプションリストに指定されたケーブルを使用します。

以前 x4 カードで使用されていたスロットに x8 カードをホットプラグで装着すると、パフォーマンスに制限が見られる (CR 6987359)

以前 4 ポート (Cu) PCIe (x4) Northstar ExpressModule (パーツ番号 (X)7284A-Z-N) を装着していた PCI Express モジュールスロットに、デュアル 10GbE SFP+ PCIe2.0 Niantic EM ネットワークインタフェースカード (NIC) (パーツ番号 1110A-Z) のホットプラグを実行すると、デュアル 10GbE SFP+ PCIe2.0 Niantic NIC の機能を活かした期待通りのパフォーマンスが見られないことがあります。

この問題は、スロットが以前は未使用だった場合や、別のオプションカードで使用されていた場合、またはシステムの電源投入時にカードが装着されている場合には発生しません。

回避方法:

次の方法のいずれかを使用して、もう一度、デュアル 10GbE SFP+ PCIe2.0 Niantic EM カードのホットプラグを実行します。

- `cfgadm(1m)` コマンドを使用してカードの接続をいったん切断してから再接続します。

```
# cfgadm -c disconnect slot-name  
# cfgadm -c configure slot-name
```

- `hotplug(1M)` コマンドを使用してデバイスを無効化し、電源を切ってから、電源を入れてデバイスを有効化します。

```
# hotplug disable device-path slot-name  
# hotplug poweroff device-path slot-name  
# hotplug poweron device-path slot-name  
# hotplug enable device-path slot-name
```

- カードのアテンション (ATTN) ボタンを使用して構成解除してから、カードを再構成します。

注 - 2 回目のホットプラグ操作の一環として、物理的にカードを取り外して再装着する必要はありません。

UE と CE のメモリー障害後にエラーメッセージが保持されない (CR 6990058)

サーバーのメモリーに修正不可能なエラー (UE) が発生し、続いて修正可能なエラー (CE) が発生した場合、正しいエラーメッセージは生成されず、サービスプロセッサによって保持されません。メモリーの問題を分析することはできません。

回避方法:

システムを再起動します。メモリーの問題が続く場合は、ご購入先にお問い合わせください。

負荷が非常に重い状況で、ウォッチドッグのタイムアウトが発生することがある (CR 6994535)

ワークロードが異常に重い場合に、クラッシュやパニックの兆候がまったくない状態で突然、ホストが OBP にリセットされたように見えることがあります。ILOM イベントログには、「Host watchdog expired」というエントリが記録されます。

SP イベントログを表示します。

```
-> show /SP/logs/event/list
```

この問題によりサーバーに影響が出ている場合、イベントログに「Host watchdog expired」というエントリが含まれています。

回避方法:

承認サービスプロバイダに、フィックスが適用可能かどうかを問い合わせてください。

また、Oracle Solaris `/etc/system` ファイルに次のエントリを追加することで、ウォッチドッグのタイムアウト期間を延長することもできます。

```
set watchdog_timeout = 600000
```

これにより、ウォッチドッグのタイムアウト期間が 10 分 (600,000 ミリ秒) に延長されます。

極端な場合は、次のエントリを `/etc/system` ファイルに追加して、ウォッチドッグのタイムアウトをすべて無効にすることもできます。

```
set watchdog_enabled = 0
```

注 - /etc/system への変更を有効にするには、サーバーをリブートする必要があります。

回復不能な USB ハードウェアエラーが発生することがある (CR 6995634)

まれに、次のような回復不能な USB ハードウェアエラーが発生することがあります。

```
usba: WARNING: /pci@400/pci@1/pci@0/pci@8/pci@0/usb@0,2 (ehci0): Unrecoverable
USB Hardware Error
usba: WARNING: /pci@400/pci@1/pci@0/pci@8/pci@0/usb@0,1/hub@1/hub@3 (hubd5):
Connecting device on port 2 failed
```

回避方法:

システムを再起動します。このようなエラーメッセージが解消されない場合は、ご購入先にお問い合わせください。

修正不可能なエラー (UE) の発生した障害のある DIMM をできるだけ早く交換する (CR 6996144)

DIMM に修正不可能なエラー (UE) が発生すると、サーバーは `fault.memory.bank` エラーを生成し、DIMM に障害があることを示すラベルを付けます。このエラーは、Oracle ILOM の `show faulty` コマンドまたは `fmdump -v` コマンドを使用して表示することができます。

システムの DIMM で修正不可能なエラーが持続する (複数回再起動してもエラーが発生する) 場合は、サーバーのダウンタイムを回避するためにできるだけ早くこの DIMM を交換してください。

回避方法:

障害のある DIMM を交換するためのダウンタイムをスケジューリングするのではなく、できるだけ早く障害のある DIMM を交換してください。不明な点は、ご購入先にお問い合わせください。

AC 電源が 120 秒未満で取り外されると、サービスプロセッサが初期化されないことがある (CR 6997182)

AC 電源が 120 秒未満で取り外されると、サービスプロセッサ (SP) が初期化されないことがあります。

回避方法:

SP を初期化するには、4 本のサーバー電源コードをすべて抜きます。120 秒以上待機してから、電源コードを再接続します。

電圧障害のためホストの電源が入らない (CR 7003014)

システムの電源投入時のごく短時間に、ILOGM によりプロセッサモジュールのいずれか (PM0 または PM1) で 12V センサーの問題が報告され、ログにシステム障害として記録され、電源投入シーケンスが中断されることがあります。

次は、ILOGM start /SYS コマンドが失敗し、電源投入シーケンスが中断された場合に、ILOGM コマンド行インタフェースに表示されるエラーメッセージの例です。

```
-> start /SYS
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
start: System faults or hardware configuration prevents power on.
```

ILOGM start /SYS コマンドでシステムに電源が入らない場合は、ILOGM イベントログを表示します。

```
-> show /SP/logs/event/list
```

次のように、ILOGM イベントログに PMx/PDx/V_+12V0 (x は 0 または 1) を含むエラーが表示されている場合は、この問題が発生している可能性があります。

```
1115 Sat Jan 1 12:44:15 2000 IPMI Log minor
ID = b2 : 01/01/2000 : 12:44:15 : Voltage : PM0/PD1/V_+12V0 : Lower Non
-critical going low : reading 0 <= threshold 11.43 Volts
```

また、ILOGM 障害管理シェルに、プロセッサモジュールに障害があることが示されます。

障害があるコンポーネントのリストを表示するには、次の操作を行います。

1. ILOGM 障害管理シェルを起動します。

```
-> start /SP/faultmgmt/shell
Are you sure you want to start /SP/faultmgmt/shell (y/n)? y
```

2. 障害があるコンポーネントのリストを表示します。

```
faultmgmtsp> fmadm faulty
```

次の例は、プロセッサモジュール 0 (PM0) に電圧センサー障害があることを示しています。

Time	UUID	msgid	Severity
2010-11-12/19:59:33	c55af62d-2da0-48de-f02f-b437146752f7	SPT-8000-DH	Critical
Fault class : fault.chassis.voltage.fail			
FRU	: /SYS/PM0 (Part Number: 541-4182-08) (Serial Number: 1005LCB-1041HB01A1)		
Description	: A chassis voltage supply is operating outside of the allowable range.		
Response	: The system will be powered off. The chassis-wide service required LED will be illuminated.		
Impact	: The system is not usable until repaired. ILOM will not allow the system to be powered on until repaired.		
Action	: The administrator should review the ILOM event log for additional information pertaining to this diagnosis. Please refer to the Details section of the Knowledge Article for additional information.		

回避方法:

承認サービスプロバイダに、この問題のフィックスが適用可能かどうかを問い合わせてください。

フィックスがなく、電源投入に失敗し、PMx/PDx/V_+12V0 センサーのいずれかに関するイベントが発生している場合は、下記のいずれかの手順で障害を解決してから、システムの電源を入れてみます。

1. 次のいずれかの方法で障害を解決します。

a. ILOM を使用して障害を解決するには、次のコマンドを実行します。

```
-> set FRU-name clear_fault_action=true
```

たとえば、プロセッサモジュール 0 (PM0) の障害を解決するには、次のコマンドを実行します。

```
-> set /SYS/PM0 clear_fault_action=true
```

b. ILOM 障害管理シェルを使用して障害を解決するには、次のコマンドを実行します。

```
faultmgtmsp> fmadm repair FRU-name
```

たとえば、プロセッサモジュール 0 (PM0) の障害を解決するには、次のコマンドを実行します。

```
faultmgtmsp> fmadm repair /SYS/PM0
...
faultmgtmsp> exit
->
```

2. システムの電源を入れてみます。

```
-> start /SYS
```

障害の解決後、システムの電源が問題なく入れば、CR 7003014 が発生していたことになり、システムは通常通り電源が入って動作します。

エラーが解消せずシステムに電源が入らない場合は、真性の障害として扱う必要があります。承認サービスプロバイダにお問い合わせください。

Oracle Solaris OS に関する問題

この節では、このリリースの Oracle Solaris OS に関する問題を説明します。

静的/動的入力/出力が現在サポートされていない

6983964 のフィックスが適用されていない場合、SPARC T3-4 サーバーでは、Oracle VM Server for SPARC の SDIO 機能がサポートされません。フィックスが適用可能になるまで Oracle VM Server for SPARC の SDIO 機能を使用しないでください。

詳細は、[22 ページの「SDIO ポリシー違反により、ブート時に第一ドメインがパニックを起こすおそれがある \(CR 6983964\)」](#)を参照してください。

Oracle Solaris OS では論理デバイス名の識別方法が変更された

Oracle Solaris OS では現在、論理デバイス名に `tn` (ターゲット ID) フィールドではなく、SAS 2.0 World Wide ID (WWID) を使用します。この変更は、ネットワーク経由で OS をダウンロードする場合にターゲットディスクを識別する方法に影響を及ぼします。次に、この変更の影響を理解するために重要な点を示します。

- ネットワーク経由で OS をダウンロードする場合は、HDD スロット 0 内のディスクをダウンロード先として指定するようにします。これは、OBP がデフォルトの起動デバイスとして使用するディスクです。
- WWID を使用するように変更される以前は、このディスクは論理名 `c0t0d0s0` として OS に認識されていました。
- この変更により、デフォルトの起動デバイスの識別名は `c0tWWIDd0s0` として参照されるようになります。ここで、WWID は 16 進値です。この WWID 値は、予想通りの方法で HDD スロット 0 内のディスクの物理 ID にマップされません。

注 – デフォルトでは、Oracle Solaris OS は HDD スロット 0 のディスクにインストールされます。OS を別のスロットのディスクにインストールしたい場合は、希望するスロット番号のディスクを指定します。

OS のダウンロード操作のために HDD スロット 0 を確実に識別するには、ディスクの WWID 値とその物理的な位置の対応を判断する必要があります。これを行うには、`probe-scsi-all` を実行し、出力を確認します。

`probe-scsi-all` 出力で、次のディスク識別子を探します。

- `SASDeviceName` – Oracle Solaris OS が認識するディスク WWID です。
- `SASAddress` – OBP が参照するディスク WWID です。
- `PhyNum` – ディスクが占有する物理 HDD スロットです。これも 16 進値として表現されます。
- `VolumeDeviceName` – Oracle Solaris OS が認識する RAID ボリュームの WWID です。
- `VolumeWWID` – OBP が参照する RAID ボリュームの WWID です。

SPARC T3-4 サーバーには 2 つのオンボード SAS コントローラがあり、それぞれが 4 基の接続ドライブを制御します。次の probe-scsi-all 出力の例は、8 基のドライブを備えた SPARC SPARC T3-4 の場合です。

```
ok probe-scsi-all
/pci@700/pci@1/pci@0/pci@0/LSI,sas@0

FCode Version 1.00.54, MPT Version 2.00, Firmware Version 5.00.17.00

Target 9
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc5cc8 SASAddress 5000cca00abc5cc9 PhyNum 0
Target a
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abaf620 SASAddress 5000cca00abaf621 PhyNum 1
Target b
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abcec4c SASAddress 5000cca00abcec4d PhyNum 2
Target c
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc5218 SASAddress 5000cca00abc5219 PhyNum 3

/pci@400/pci@1/pci@0/pci@8/pci@0/usb@0,2/hub@2/hub@3/storage@2
  Unit 0   Removable Read Only device   AMI       Virtual CDROM   1.00

/pci@400/pci@1/pci@0/pci@0/LSI,sas@0

FCode Version 1.00.54, MPT Version 2.00, Firmware Version 5.00.17.00

Target 9
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abcede0 SASAddress 5000cca00abcede1 PhyNum 0
Target a
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc51a8 SASAddress 5000cca00abc51a9 PhyNum 1
Target b
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abce89c SASAddress 5000cca00abce89d PhyNum 2
Target c
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc5354 SASAddress 5000cca00abc5355 PhyNum 3

{0} ok
```


次の probe-scsi-all 出力の例は RAID 構成を示します。RAID ボリュームの VolumeDeviceName は 3c2f959213c8a292 です。

```
ok probe-scsi-all
/pci@700/pci@1/pci@0/pci@0/LSI,sas@0

FCode Version 1.00.54, MPT Version 2.00, Firmware Version 5.00.17.00

Target 9
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc5cc8  SASAddress 5000cca00abc5cc9  PhyNum 0
Target a
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abaf620  SASAddress 5000cca00abaf621  PhyNum 1
Target 37e Volume 0
  Unit 0   Disk   LSI        Logical Volume   3000       1167966208 Blocks, 597 GB
  VolumeDeviceName 3c2f959213c8a292  VolumeWWID 0c2f959213c8a292

/pci@400/pci@1/pci@0/pci@8/pci@0/usb@0,2/hub@2/hub@3/storage@2
  Unit 0   Removable Read Only device   AMI        Virtual CDROM   1.00

/pci@400/pci@1/pci@0/pci@0/LSI,sas@0

FCode Version 1.00.54, MPT Version 2.00, Firmware Version 5.00.17.00

Target 9
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abcede0  SASAddress 5000cca00abcede1  PhyNum 0
Target a
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc51a8  SASAddress 5000cca00abc51a9  PhyNum 1
Target b
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abce89c  SASAddress 5000cca00abce89d  PhyNum 2
Target c
  Unit 0   Disk   HITACHI   H103030SCSUN300G A2A8       585937500 Blocks, 300 GB
  SASDeviceName 5000cca00abc5354  SASAddress 5000cca00abc5355  PhyNum 3

{0} ok
```

Oracle Solaris Jumpstart の例

次の Oracle Solaris Jumpstart プロファイル例は、特定のディスクドライブに OS をインストールする場合に WWID 構文を使用する方法を示しています。SASDeviceName は、前述の 6 基のドライブ構成から取得されています。

注 – Oracle Solaris の構文規則では、WWID 内のすべての英字を大文字にする必要があります。

```
#
install_type flash_install
boot_device c0t5000C5001CB4A637d0s0 preserve

archive_location nfs
129.148.94.249:/export/install/media/solaris/builds/s10u9/flar/latest.flar

# Disk layouts
#
partitioning explicit
filesys rootdisk.s0          free /
filesys rootdisk.s1          8192 swap
```

次の Oracle Solaris Jumpstart プロファイル例は、RAID ボリュームに OS をインストールする場合に WWID 構文を使用する方法を示しています。VolumeDeviceName は前述の RAID probe-scsi-all の例から取得されています。

```
#
install_type flash_install
boot_device c0t3CE534E42C02A3C0d0s0 preserve

archive_location nfs
129.148.94.249:/export/install/media/solaris/builds/s10u9/flar/latest.flar

# Disk layouts
#
partitioning explicit
filesys rootdisk.s0          free /
filesys rootdisk.s1          8192 swap
```

対話式インストールの例

対話式インストールでは、1つまたは複数のディスクを OS インストールのターゲットとして指定するよう求められます。この手順の目的は、インストールのために十分なディスク容量があることを確認することです。この手順では、ソフトウェアのインストール先にするドライブに対応した WWID 値を持つディスクを指定します。

これらの WWID の値を次の対話式操作の例に示します。これは前述の例で使用した 6 個のディスク環境に基づいています。インストール先として選択されたドライブは HDD スロット 0 (デフォルトの OBP 位置) です。

注 – その他のディスクを使用する場合は、HDD スロット 0 内のディスクではなく、その他のディスクを指定できます。

```
_ Select Disks_

On this screen you must select the disks for installing Solaris software. Start
by looking at the Suggested Minimum field; this value is the approximate space
needed to install the software you've selected. Keep selecting disks until the
Total Selected value exceeds the Suggested Minimum value.
NOTE: ** denotes current boot disk

Disk Device                                     Available Space
=====
[ ]      c0t5000CCA00ABAF620d0                  286090 MB
[X] **   c0t5000CCA00ABC51A8d0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABC5218d0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABC5354d0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABC5CC8d0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABCE89Cd0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABCEC4Cd0                  286090 MB
[ ]      c0t5000CCA00ABCEDE0d0                  286090 MB

                                     Total Selected: 286090 MB
                                     Suggested Minimum:  5009 MB

Esc-2_Continue    F3_Go Back    F4_Edit    F5_Exit    F6_Help
```

cfgadm -al コマンドの出力にかかる時間が長い (CR 6937169)

ホットプラグデバイスを設定または設定解除する `cfgadm(1M)` コマンドは、完了するまでに時間がかかります。たとえば、`cfgadm -al` コマンドは、すべてのホットプラグデバイスの接続点をリストするまでに 5 分以上かかることがあります。

回避方法:

`hotplug(1M)` コマンドを使用してホットプラグデバイスを管理します。

注 - `cfgadm -al` の代わりに `hotplug` コマンドを使用する回避方法は、PCI デバイスにのみ有効です。

- `hotplug list -l` コマンドを使用してホットプラグ PCIe スロットのステータスをリストします。たとえば、次のように入力します。

```
# hotplug list -l | grep PCI-EM
/pci@400/pci@1/pci@0/pci@4 [PCI-EM2] (EMPTY)
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@1 [PCI-EM0] (EMPTY)
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@2 [PCI-EM1] (EMPTY)
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (ENABLED)
/pci@500/pci@1/pci@0/pci@1 [PCI-EM8] (EMPTY)
/pci@500/pci@1/pci@0/pci@2 [PCI-EM10] (ENABLED)
/pci@500/pci@2/pci@0/pci@2 [PCI-EM9] (ENABLED)
/pci@500/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM11] (EMPTY)
/pci@600/pci@1/pci@0/pci@4 [PCI-EM4] (EMPTY)
/pci@600/pci@1/pci@0/pci@5 [PCI-EM6] (ENABLED)
/pci@600/pci@2/pci@0/pci@0 [PCI-EM7] (EMPTY)
/pci@600/pci@2/pci@0/pci@5 [PCI-EM5] (EMPTY)
/pci@700/pci@1/pci@0/pci@4 [PCI-EM14] (EMPTY)
/pci@700/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM12] (ENABLED)
/pci@700/pci@2/pci@0/pci@4 [PCI-EM13] (EMPTY)
/pci@700/pci@2/pci@0/pci@5 [PCI-EM15] (EMPTY)
```

- `hotplug disable` コマンドを使用して PCIe カードを無効にします。

たとえば、PCI-EM3 で EM カードを無効にして、有効でなくなったことを確認するには、次のように入力します。

```
# hotplug disable /pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 PCI-EM3
# hotplug list -l | grep PCI-EM3
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (POWERED)
```

- `hotplug poweroff` コマンドを使用して PCIe カードの電源を切ります。
たとえば、PCI-EM3 で EM カードの電源を切るには、次のように入力します。

```
# hotplug poweroff /pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 PCI-EM3
# hotplug list -l | grep PCI-EM3
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (PRESENT)
```

これで、EM カードを物理的に取り外すことができます。

- `hotplug list` コマンドを使用してカードが取り外されたことを確認します。
たとえば、次のようにします。

```
# hotplug list -l | grep PCI-EM
...
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (EMPTY)
...
```

- `hotplug poweron` コマンドを使用して PCIe カードに電源を入れます。
たとえば、PCI-EM3 で EM カードに電源を入れ、状態が `POWERED` に移行したことを確認するには、次のように入力します。

```
# hotplug poweron /pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 PCI-EM3
# hotplug list -l | grep PCI-EM3
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (POWERED)
```

- `hotplug enable` コマンドを使用して PCIe カードを有効にします。
たとえば、PCI-EM3 で EM カードを有効にして、状態が `ENABLED` に移行したことを確認するには、次のように入力します。

```
# hotplug enable /pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 PCI-EM3
# hotplug list -l | grep PCI-EM3
/pci@400/pci@2/pci@0/pci@3 [PCI-EM3] (ENABLED)
```

注 – `hotplug` コマンドの詳細については、`hotplug(1M)` マニュアルページを参照してください。

正しくない nxge 警告メッセージ (CR 6938085)

サーバーの通常動作時に、システムコンソールで次のような警告メッセージが表示されることがあります。

```
date time machinename nxge: [ID 752849 kern.warning] WARNING: nxge0 : nxge_hio_init:
hypervisor services version 2.0
```

これらのメッセージは正しい警告メッセージではありません。ドライバは複数のハイパーバイザーバージョンで動作できるため、これらのギガビット Ethernet ドライバ (nxge) メッセージにはハイパーバイザーのバージョン番号が表示されます。これらのメッセージには、警告メッセージではなく、情報または通知メッセージというラベルが付けられる必要があります。

回避方法:

このメッセージは無視しても問題ありません。

システムコンソールでの正しくない割り込みメッセージ (CR 6963563)

サーバーの正常な動作時や、Oracle VTS システムエクササイザの実行時に、システムコンソールに次のメッセージが表示されることがあります。

```
date time hostname px: [ID 781074 kern.warning] WARNING: px0: spurious
interrupt from ino 0x4
date time hostname px: [ID 548919 kern.info] ehci-0#0
date time hostname px: [ID 100033 kern.info]
```

回避方法:

このメッセージは無視してかまいません。

prtpicl コマンドがドライブ情報を表示しない (CR 6963594)

以前のシステムでは、prtpicl -v コマンドを実行すると、disk_discovery 見出しの下にシステムドライブの状態、場所、およびデバイスパスが表示されました。SPARC T3 システムでは、prtpicl コマンドはこのドライブ情報を表示しません。

対処方法:

OpenBoot probe-scsi-all コマンドを使用します。出力例については、[13 ページ](#)の「Oracle Solaris OS では論理デバイス名の識別方法が変更された」を参照してください。

割り込みが見つからないことにより USB ハブホットプラグスレッドがハングアップした結果、プロセスのハングアップが発生する (6968801)

SPARC T3 シリーズサーバー上で Oracle VTS ソフトウェアを実行している場合、Oracle VTS テストがハングアップする (ごくまれに) 場合があります。このテストプロセスがハングアップすると、ハングアップしたプロセスによって、障害管理設定ツール (fmadm) およびシステム設定出力コマンド (prtconf) など、他のプロセスとコマンドもハングアップします。ハングアップしたプロセスを強制終了することはできません。

回避方法:

システムを再起動します。問題が繰り返し発生するす場合、ご購入先にお問い合わせください。本稼働環境では Oracle VTS ソフトウェアを実行しないようにしてください。

Oracle Solaris のログインまたはログアウト時にローカルコンソールの遅延が大きい (CR 6971884)

ローカルコンソールまたはローカルのキーボード、マウス、モニタを使用して Solaris OS に対してログインまたはログアウトを行う際、大きな遅延 (最大 3 分) が発生することがあります。

回避方法:

ネットワーク接続を使用してシステムにアクセスし、/etc/logindevperm 設定ファイルから USB コンソールデバイス名 (/dev/usb/*) を含む行をコメントアウトします。

```
# /dev/console    0600 /dev/usb/hid[0-9]+          # hid devices

should have the same permission with conskbd and consms

# /dev/console    0600 /dev/usb/[0-9a-f]+[.][0-9a-f]+/[0-9]+/*

driver=scsa2usb,usb_mid,usbprn,ugen          #libusb/ugen devices

...
```

Oracle Solaris OS の初期インストール時の正しくないエラーメッセージ (CR 6971896)

miniroot は、サーバーを起動して OS を設定するために必要な最小限の Oracle Solaris OS ソフトウェアを含む、起動可能なルートファイルシステムです。miniroot は、インストール処理時にのみ実行されます。

サーバーが初期構成のために miniroot を起動すると、システムコンソールに次のメッセージが表示される場合があります。

```
Fatal server error:
InitOutput: Error loading module for /dev/fb

giving up.
/usr/openwin/bin/xinit: Network is unreachable (errno 128):
unable to connect to X server
/usr/openwin/bin/xinit: No such process (errno 3): Server error.
```

このメッセージは、Oracle Solaris OS miniroot 内の Xsun サーバーで、サービスプロセスの AST グラフィックスデバイスのサポートされているドライバが見つからないことを示します。これらのメッセージは、miniroot には Xsun 環境のみが含まれていて、AST フレームバッファ (astfb) は Xorg 環境でのみサポートされているために表示される、予想されるメッセージです。Xorg 環境がインストールされたシステムに含まれているため、インストールされた Oracle Solaris OS の実行時にグラフィックスデバイスを使用できます。

回避方法:

このメッセージは無視してかまいません。

SDIO ポリシー違反により、ブート時に第一ドメインがパニックを起こすおそれがある (CR 6983964)

Oracle VM Server for SPARC を使用するシステムがあり、1 つ以上のゲストに対して静的/直接入力/出力 (Static/Direct Input/Output、SDIO) 機能を使用するように構成している場合、システムの電源投入直後で第一ドメインのブート中に、第一ドメインがパニックを起こす可能性があります。

次のようなパニックメッセージが表示されます。

```
panic[cpu6]/thread=2a101283ca0: Fatal error has occurred in: PCIE
fabric.(0x1)(0x43)

000002a101283700 px:px_err_panic+1ac (702cec00, 7bf57000, 43, 2a1012837b0, 1, 0)
%10-3: 0000009980001602 00000000702cf000 0000000000000000 0000000000000001
%14-7: 0000000000000000 00000000018af000 0000000000000001 0000000000000000
000002a101283810 px:px_err_fabric_intr+1c0 (6002c594480, 1, 702cf000, 1, 43,
200)
%10-3: 0000000000000200 0000000000000001 00000000702cf2c0 00000000702cf000
%14-7: 00000000702cf2b8 00000000702cf000 0000000000000001 000006002c4d4790
000002a101283980 px:px_msiq_intr+1e8 (6002c447bf0, 30002df1908, 7bf495d0, 0, 1,
6002c6f01f0)
%10-3: 000006002c639220 000006002b561e40 0000030002df1908 0000000000000000
%14-7: 0000000000000000 0000000003a60000 000002a101283a80 0000000000000030
```

この問題が発生する可能性があるのは、第一ドメインのブート中です。既に稼働中のシステムには発生しません。

回避方法:

この問題の回避方法は現在ありません。承認サービスプロバイダに、フィックスの有無について問い合わせてください。

障害のある CPU をホストに再設定した後、オンボードの Ethernet デバイスが接続に失敗する (CR 6984323)

失敗した CPU、または無効になった CPU の構成がホストに戻った後でサーバーを再起動すると、オンボードのギガビット Ethernet 接続はネットワークに接続できません。次の例のメッセージがシステムコンソールに表示されます。

```
igb0: DL_ATTACH_REQ failed: DL_SYSERR (errno 22)
igb0: DL_BIND_REQ failed: DL_OUTSTATE
igb0: DL_PHYS_ADDR_REQ failed: DL_OUTSTATE
igb0: DL_UNBIND_REQ failed: DL_OUTSTATE
Failed to plumb IPv4 interface(s): igb0
```

回避方法:

あと 2 回サーバーを再起動します。問題が続く場合は、ご購入先にお問い合わせください。

hostconfig コマンドが、物理リソースインベントリのマシン記述子 (Physical Resource Inventory Machine Descriptor、PRI MD) 内の CPU シリアル番号を更新しない (CR 6989166)

CPU スレッドでエラーが発生すると、エラーの原因が修正された場合でも、そのエラーの記録がシステムの再起動時に保持されます。このレコードが存在するために、システムの再起動時に CPU スレッドがオフラインになることがあります。

回復:

障害のあるスレッドを明示的に有効にします。

Oracle Enterprise Manager プロセスがハングアップして強制終了できなくなる (CR 6994300)

Oracle Enterprise Manager の Java プロセスがハングアップしてサーバー上で強制終了できないことがあります。Enterprise Manager プロセスがハングアップすると、プロセスはその Web UI ポート上で待機し続けるため、プロセスを強制終了することができません。この問題は、Oracle Database ソフトウェアにバンドルされた Java SE 5.0 バージョン、および最新のダウンロード可能な Java SE 6 Update 22 バージョンを実行するサーバー上で発生します。

回避方法:

システムを再起動します。問題が繰り返し発生する場合は、ご購入先にお問い合わせください。

ギガビット Ethernet (nxge) ドライバが、Oracle Solaris 10 10/09 OS および Solaris 10 9/10 パッチバンドルを適用したシステム上でロードしない (CR 6995458)

サーバーに Oracle Solaris 10 10/09 OS および Solaris 10 9/10 パッチバンドルをインストールすると、10/1 ギガビット Ethernet (nxge) ドライバは 10 GbE デバイスに接続しません。

回避方法:

/etc/driver_aliases ファイルに次の行を追加します。

```
nxge "SUNW,niusl-kt"
```

次にサーバーを再起動し、ギガビット Ethernet デバイスを通常どおりに設定します。

モジュールメモリー制限超過により回復不能なメモリーエラーが発生したと表示され、診断エンジン (eft) が無効になる (CR 7000649)

特定の状況で、メモリーエラーにより FMA 診断エンジンの内部エラーが発生し、メモリーエラーの診断を適切に実行できなくなる可能性があります。

fmadm faulty コマンドの出力で、障害があるコンポーネントのリストに FMD-8000-2K が含まれる場合は、この障害が発生している可能性があります。

たとえば、次のように入力します。

```
# fmadm faulty
...
-----
TIME                EVENT-ID                MSG-ID                SEVERITY
-----
Nov 16 12:02:01 865e378b-27a5-ebf7-c550-e34179d57241 FMD-8000-2K Minor

Host      : xxxxxxxx
Platform  : ORCL,SPARC-T3-4   Chassis_id  :
Product_sn :

Fault class : defect.sunos.fmd.module
Affects     : fmd:///module/eft faulted and taken out of service
FRU         : None
             faulty

Description  : A Solaris Fault Manager component has experienced an error that
               required the module to be disabled. Refer to
               http://sun.com/msg/FMD-8000-2K for more information.

Response    : The module has been disabled. Events destined for the module
               will be saved for manual diagnosis.

Impact      : Automated diagnosis and response for subsequent events associated
               with this module will not occur.

Action      : Use fmdump -v -u <EVENT-ID> to locate the module. Use fmadm
               reset <module> to reset the module.
```

CR 7000649 が発生していることを確認するには、fmdump -eV コマンドを使用して、「eft's allocation of XX bytes exceeds module memory limit」という文字列を含む ereport.fm.fmd.module ereport を探します。ここで、XX は任意の数字です。

たとえば、次のように入力します。

```
# fmdump -eV
...
Nov 16 2010 12:02:01.052061745 ereport.fm.fmd.module
nvlist version: 0
  version = 0x0
  class = ereport.fm.fmd.module
  detector = (embedded nvlist)
  nvlist version: 0
    version = 0x0
    scheme = fmd
    authority = (embedded nvlist)
    nvlist version: 0
      version = 0x0
      product-id = ORCL,SPARC-T3-4
      server-id = xxxxxxxxx
    (end authority)
  mod-name = eft
  mod-version = 1.16
(end detector)

ena = 0x3ddfe7a2c3f07401
msg = eft's allocation of 20 bytes exceeds module memory limit (10485756)
__ttl = 0x1
__tod = 0x4ce2e339 0x31a6631
```

回避方法:

fmdump -eV の出力に CR 7000649 が発生していることが示されている場合、フィックスが適用可能かどうかを承認サービスプロバイダにお問い合わせください。

診断を有効にしてサーバーのリブートをスケジュールし、POST で疑わしい DIMM の検出を試みます。

システム上の全 Solaris セッションを停止してから、次の操作を実行します。

1. システムの電源を切ります。

```
-> stop /SYS
```

2. `keyswitch_state` を `Diag` に設定します。

```
-> show /SYS keyswitch_state
/SYS
  Properties:
    keyswitch_state = Normal

-> set /SYS keyswitch_state=diag
Set 'keyswitch_state' to 'diag'
-> show /SYS keyswitch_state
/SYS
  Properties:
    keyswitch_state = Diag
```

注 – このオプションにより、以前に設定された診断プロパティの値がオーバーライドされます。

3. サーバーの電源を入れます。

```
-> start /SYS
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
Starting /SYS
```

4. 電源投入シーケンスが完了したら、`ILOM 障害管理シェル`に入って `ILOM show faulty` コマンドを使用し、障害がある `DIMM` を検出します。

a. 障害管理シェルを起動します。

```
-> start /SP/faultmgmt/shell
Are you sure you want to start /SP/faultmgmt/shell (y/n)? y
```

b. 障害があるコンポーネントのリストを表示します。

```
faultmgmtsp> fmadm faulty
```

5. 障害があると報告された `DIMM` があればすべて交換します。障害がある `DIMM` が報告されない場合は、承認サービスプロバイダにお問い合わせください。

ファームウェアに関する問題

この節では、システムファームウェアに関する問題について説明します。

断続的な WARNING: ios#, pe# Link Width x8 Link Speed GEN1 メッセージ (CR 6958263)

サーバーが OpenBoot PROM (OBP) に電源を供給すると、システムコンソールに次のような警告メッセージが表示されることがあります。

```
WARNING: ios0, pe#0 Link Width x8 Link Speed GEN1.
```

回避方法:

このメッセージは無視しても問題ありません。

sas2flash ユーティリティーが、Sun Storage 6 Gb SAS RAID PCIe 外付け HBA を 6 台以上インストールしている場合に失敗する (CR 6983246)

システムに Sun Storage 6 Gb SAS RAID PCIe 外付け HBA を 6 台以上インストールしていると、LSI Corporation の sas2flash ユーティリティーは失敗します。たとえば、sas2flash -listall コマンドを使用して HBA をリストしようとする、次のエラーメッセージが表示される場合があります。

```
6 SAS2008(??) ERROR: Failed to Upload Image!
----- ERROR: Failed to Upload Image!
```

回避方法:

システムにインストールする Sun Storage 6 Gb SAS RAID PCIe 外付け HBA を 5 台以下にします。

PCIe エンドポイントデバイスをゲストドメインに追加すると、ハイパーバイザの異常終了やシャットダウンが発生する (CR 6999227)

PCIe エンドポイントデバイスをゲストドメインに追加してからルートドメインをリブートした場合、Oracle VM Server for SPARC 2.0 システムで次のいずれかの問題が発生することがあります。

- ハイパーバイザの異常終了やシャットダウンが発生する
- OpenBoot PROM に戻ることができない
- Oracle Solaris OS に戻ることができない

PCIe デバイスの追加後にゲストドメインを起動しなかった場合にのみ、これらの問題が発生します。ゲストドメインを起動しなかったことで、以前に設定された仮想インタフェースが適切にクリーンアップされなかった可能性があります。

回避方法:

これらの問題が発生した場合は、システムを再起動します。これらの問題を回避するために、I/O リソースをゲストドメインに追加した後は、ゲストドメインを起動します。この時点でゲストドメインをアクティブにしたいくない場合は、ゲストドメインを起動後に停止します。

HOST_COOLDOWN ポリシーが有効な状態で stop /SYS を実行すると、重大な電圧障害が発生する

次の ILOM コマンドで示されるように、HOST_COOLDOWN ポリシーは SP ポリシーリスト内でデフォルトで無効になっています。

```
-> ls /SP/policy

/SP/policy
  Targets:

  Properties:
    HOST_AUTO_POWER_ON = disabled
    HOST_COOLDOWN = disabled
    HOST_LAST_POWER_STATE = disabled
    HOST_POWER_ON_DELAY = disabled
    PARALLEL_BOOT = enabled

  Commands:
    cd
    set
    show
```

この値を enabled に変更すると、システムの電源を切るときに fault.chassis.voltage.fail 障害が発生します。この障害が解消されるまで、システムに電源を入れることはできません。

この障害は、ILOM コマンド行インタフェースでイベントリストに出力されます。たとえば、次のように入力します。

```
-> show /SP/logs/event/list
```

```
24756 Wed Nov 24 11:23:36 2010 Fault Fault critical
      Fault detected at time = Wed Nov 24 11:23:36 2010. The suspect component:
      /SYS/MB has fault.chassis.voltage.fail with probability=100. Refer to ht
      tp://www.sun.com/msg/SPT-8000-DH for details.
24755 Wed Nov 24 11:23:36 2010 System Log minor
      Host: Solaris powering down
24754 Wed Nov 24 11:23:24 2010 System Log minor
      Host: Host stopped
```

回避方法:

1. HOST_COOLDOWN ポリシーを無効にします。

```
-> set /SP/policy HOST_COOLDOWN=disabled
Set 'HOST_COOLDOWN' to 'disabled'
```

2. 障害を解消します。

```
-> set /SYS/MB clear_fault_action=true
Are you sure you want to clear /SYS/MB (y/n)? y
Set 'clear_fault_action' to 'true'
```

3. システムを再起動します。

```
-> start /SYS
```